

## 新理事長に出牛学長（兼任） 学校法人専修大学役員改選



学校法人専修大学は10月29日（水）開催の理事会・評議員会において任期満了に伴う役員改選を行い、11月3日（月）開催の理事会で出牛正芳氏（専修大学長）を新理事長に選任した。出牛理事長は1998年（平成10年）に専修大学長に就任し現在2期目。学長として教育研究環境の改革を推し進めるかたわら、学長として培ってきた経験と手腕を生かしながら、今後は大学運営にも大きな期待が寄せられる。

[出牛新理事長のプロフィール]

1959年（昭和34年）早稲田大学大学院商学研究科博士課程単位取得。

商学博士。専攻はマーケティング。

1961年（昭和36年）専修大学専任講師

1971年（昭和46年）教授

1998年（平成10年）学長に就任、現在2期目。

### 「オール専修」の総力を結集 理事長就任にあたって 出牛正芳

大学が置かれている厳しい状況下、このたび学校法人専修大学の理事長に選任されました。就任して間もないこともあり、まとまった所見を述べるのが出来ませんが、理事長としての重責を果たすために、これからの大学運営で留意したいと考えている点を述べてみたいと思います。

このたびの理事長就任にあたって、第1に「学生を基本にすえた大学づくり」、第2に「社会知性の開発」へのさらなる挑戦、を目標にして「法人と教学が一体となった大学運営」の実現に心がけたいと考えております。前者は、原点に立ち返って大学を考える上での要点であり、後者は、専修大学が21世紀を迎えるにあたって打ち出した大学ビジョンを堅持・推進することが重要と考えるからです。

「大学改革にモデルはない」とも言われています。現代を見据えて、現状に安住することなく、専修大学の歴史を踏まえた大学改革が模索されるべきと思われます。その際、個別の課題を解決しながら、「グランドデザイン」を作成するのは、困難さを伴う作業ではありますが、教員・職員と共に考え、対話を通じて、大学の未来像を描いてみたいと思います。

言うまでもなく、大学は教育と研究の場であります。その大学が、今、問われているのは大学の教育力です。教員と職員がうって一丸とならねばその力は発揮されません。もちろん、大学の教育力の強化は、法人として取り組まなければならない教育条件の整備と充実と深く関連しております。

大学には、学生に豊かなキャンパスライフを保証する責務があります。限りある財源を考慮しながら、生田・神田のキャンパスの充実を図り、学生へのサポートシステムをさらに充実していくことが大切です。

また、大学は教育力で評価されるだけでなく、その研究力においても評価されます。そのためには、研究条件の整備にも目を向けたいと思います。

大学運営の要は、直接、学生と接する教員と職員です。両者の協力が円滑さに欠けるとすれば、大学は致命的な危機に陥ります。大学各機関が、基本と目標に立ち返って、これまでの組織とその運営を再検討し、活性化するための方途を模索することが望まれます。

加えて、今後の大学運営にあたっては、慎重な審議と迅速な決定のバランスを考慮して進めていくことが重要と考えております。

時代に即応した専門職大学院、学部・学科の再編成を検討し、大学の活性化を目指していくことが必要です。また、専修大学と石巻専修大学・専修大学北海道短期大学との協同関係も、現状を踏まえた議論を重ねることが大切であります。

また、健全な大学運営は、健全な財政の裏打ちがあって初めて実現出来るものです。限りある財源を考慮すれば、財政の現状を見据えた合理的でかつ効率的な運営が望まれます。予算・決算の公表は、学生とその父母、教員、職員また広く社会に大学の方針・現状を知っていただく大切な機会です。これまでの開示の仕方に改善を加えて、深い理解が得られるようにしていく努力を考えねばならないでしょう。

以上、意を尽くせぬ点や具体性に欠ける点を多々含んでおりますが、所感の一端を述べさせていただきます。

オール専修（専修大学・石巻専修大学・専修大学北海道短期大学・附属高校・校友）の総力を結集して、新しい一歩を踏み出したいと思っております。

教員・職員にとどまることなく、学生のご父母・全国で活躍している校友の皆さんのご理解と今後のご支援をお願いいたします。

【ニュース専修11月号1面】

## エクステンションセンター秋の公開講座 両キャンパスで開講中



▲「伝統的商店街の活性化」について講演する大和和道氏(神田)

エクステンションセンター主催の、秋の公開講座が10月から神田、生田両キャンパスでスタート。今年は昨年を大きく上回る述べ約3200人の申し込みがあった。

◆神田では「ビジネス変革の実践者」(全7回)を統一テーマとして、未来を先取りする新戦略を打ち出し、ビジネスの最前線で戦っている7人の実務者と本学教授陣とのコラボレーション方式による講演を展開。



▲箱根山神宮寺を軸に神仏習合を追跡する矢野建一文学部教授(生田)

最終は11月28日。「日米経済摩擦の経緯と教訓」と題して、富士写真光機(株)宗雪雅幸取締役会長が講演を行う。

◆生田では「人物で読み解く相模、武蔵の歴史」(全10回)を統一テーマに、古代から明治期まで当地の歴史に残る人物たちが、その時代の思想、政治、文化、社会、事件などにどのような影響を与えたかを古文書、遺跡、記録類を軸に追跡。

最終は11月29日。「二宮尊徳の虚像と実像」を飯森富夫非常勤講師が、「北村透谷と美那子」を新井勝紘教授が講演の予定。

【ニュース専修11月号1面】

キャンパス探訪 アートの旅〈13〉『風舞う』『箱根』



『風舞う』



『箱根』

『抽象』と『具象』の絵画世界が、見事に対比できる。生田キャンパス7号館B1ロビーの2点を案内する。

常世隆(国画会会員)『風舞う』は、透明感のある、色彩豊かな世界を演出する。「風」は古代中国では、「鳳」が風の使者

で、その羽ばたきで風が起こると考えられた。「風」と「鳳」の原字はまったく同じ。鳥が舞うような構成。本学のシンボル「鳳」を考えて観るのも楽しい。

対照的に岡本透(旺玄会委員)『箱根』の風景抽象画は、太い線、重厚な色彩。ゴッホ作品を連想させる雄大な光景で、スケッチの確かさが伝わってくる。確定出来ないが、静岡県側から見た芦ノ湖越しの駒ヶ岳方面か? 岡本は校友(昭39経済)。92年旺玄会展出品作品である。

【ニュース専修11月号1面】